

## はじめに

ネオ・スピリチュアリズムは、桑原啓善師が創始、唱導する人生指導原理です。いわば二一世紀の新しい靈性時代の生き方を示すものです。といつてもネオ・スピリチュアリズムは、いわゆる宗教ではありません。近代心靈研究の靈魂説に立脚した、知識と理論によつて体系化され、構築された一つの学問体系です。非常に合理的でわかり易いので、私たち一般庶民誰でもが理解出来ます。

ネオ・スピリチュアリズムは、「人は神の子、愛が平和と幸福の宇宙法則」を根源の真理として、人が日常生活を本当の愛と奉仕で生きれば、人は神とつながり地球を愛の星に変えることが出来ると説いています。また人が愛と奉仕の生活実践を狂いなくするためには、見えない体「媒体」を認めその上に構築された媒体論があります。そして人は媒体浄化進化（靈性進化）してゆき、その為には輪廻転生をくり返して、

神に帰ると説きます。

一八四八年、近代心靈研究發生から二一世紀の変わり目に成立したネオ・スピリチュアリズムまでの一六〇年間の歩みを俯瞰すると、ネオ・スピリチュアリズムとは、西欧の科学的合理的なスピリチュアリズムが日本に渡り、日本的心性である生命一元の土壤で花開いた、いわば東西文明統合の花のように思われます。それは唯物主義文明を愛の靈性文明に転換するために拓かれた奇跡的なほそい一すじの道であり、シルバー・バーチがいうところの「神界計画」ではないでしょうか。ですからネオ・スピリチュアリズムは庶民が誰でも実践できるように、極めて平易合理的に述べられてはいますが、その本質は新しい人類文明の核となるものと考えられるのです。

本書の構成は、

- ・ 靈を認めない現代文明の行き詰まり（序章）
- ・ ネオ・スピリチュアリズムの立脚点である近代心靈研究について（第一章）

- ・ 西欧スピリチュアリズムについて（第二章）
- ・ 日本に入り進展したスピリチュアリズム  
浅野和二郎の日本神霊主義について（第三章）
- ・ 日本神霊主義を更に前進させた脇長生の日本神霊主義について（第四章）
- ・ ネオ・スピリチュアリズムの成立とその概要について（第五章）
- ・ ネオ・スピリチュアリズムと日本の精神について（第六章）

となっております。本書を通読していただければネオ・スピリチュアリズムの概略が分かると思います。また理解を助けるために、桑原啓善師が作成した図表を多数揭示しました。ぜひ本書をお読みになり、本当の愛と奉仕に生きる人となって、靈性時代を拓くさきがけとなつていただきたいと思います。



序章 現代文明の基礎、  
唯物科学に問題がある

## 霊を認めない現代文明の行き詰まり

今なぜ、ネオ・スピリチュアリズムなのか。それは「人間は霊」（靈魂説）を認めない現代文明がゆきづまっているから——靈魂説を認めないから、人類文明はゆきづまり、地球全体危機的状況になってしまったといえるのではないか。そう考えることは、決して否定できないはずである。

桑原啓善<sup>(注1)</sup>が創始して唱導しているネオ・スピリチュアリズムは、現代科学が認めない靈魂説に立脚しているため、一般的に学問としては認識されていない。これまで山波言太郎（本名・桑原啓善）がネオ・スピリチュアリズムに基づく実践活動（リラ自然音楽運動）を他団体で発表したことはある<sup>(注2)</sup>が、ネオ・スピリチュアリズムそのものが学会等でとりあげられ論じられたことは殆どなかった。最近になってようやく渡部俊彦がネオ・スピリチュアリズムについて学会で研究発表<sup>(注3)</sup>するよう

なった。渡部がとりあげ指摘しているように、ネオ・スピリチュアリズムは深刻な現代の課題に応じて根本的な解決策を示している。ネオ・スピリチュアリズムから発展した実践活動も次々展開して、リラ自然音楽療法では目に見える成果として、山波の著書やリラ自然音楽療法研究センターの「LYRA通信」等で報告されている。山波は(注1)の前掲論文「聖書の記述が今、現実となり始めた」で、ネオ・スピリチュアリズムの立脚点「霊の存在」「神・サタン(見えない霊としての)存在」「人は神の子」を仮定された真理とすれば、そこが宇宙の事象や社会の現象を解明する新しい学問の出発点となると発言している。その通りであると思う。社会現象を眺めても、今日本ではスピリチュアルが大衆文化としてブームとなっているが、これは近代以降いくら科学(学問)が「霊」を認めなくても、亡霊のように、もぐら叩きのもぐらのように「霊」が立ちあらわれることを示しているといえよう。もはやタイムリミットではないか。現代文明の奥の院「科学」は、霊は存在しないと本当に断言できるのか。「霊は存在しない」という断言の上に、この我々の文明はすべて成り立っているのである。

だから我々は我々の責任において、もう一度、今、本当に霊は存在するのかしないのか、答えるべきなのだ。

## 霊魂説が文明転換のキーポイント

なぜアカデミズムは「霊の存在」をタブー視するのか。具体的には一八四八年に発生した近代心霊研究をなぜ黙殺するのだろうか。以前から漠然と感じていたこれらの問題意識に、津城寛文『〈霊〉の探究 近代スピリチュアリズムと宗教』は大きな示唆を与えてくれた。それは「知は力」に立脚した近代西欧文明のアキレス腱が科学の鬼子と言われる「近代心霊研究」であると再確認することが出来たからである。現在の地球と世界の危機を越えて新時代に入るには、近代心霊研究が提出した「霊の存在」

を、あらゆる学問に於て仮説として認めること、その為には学徒の一人一人が死後生存（永遠の生命）まではせめて、事実として認めること、すなわちスピリチュアリストになること。そのためには、どうしても知恵の実を嘔吐することが必要であるだろう。知恵の実の嘔吐とは、「知は力なり」から「愛は力なり」への転換である。この時、初めて真の学問の出発点に立ち、これまで見えなかったものが見えてくるのではないだろうか。ネオ・スピリチュアリズムは、そこへ至るための原理（口絵の「ネオ・スピリチュアリズム6か条」と実践（同じく「でくのぼうの生き方実践綱目」）を示したものである。

（注）

1 桑原啓善（ペンネーム山波言太郎）の略歴

「詩人、心霊研究者、自然音楽療法研究者。不可知論者であった学生時代に、心霊